

■学校経営のポイント

「まとめ」は「自分の物語」

喜名 朝博

3月、年度末となった。この頃になると学校は、「今年のまとめをしよう」「〇年生のまとめ」のように、「まとめ」という言葉を多用する。学校のあるあるだが、果たして子どもたちは「まとめ」の意味や方法を理解できているだろうか。

次の学校や学年への橋渡しとなるような「まとめ」について考えていきたい。

自分にとっての意味を考える「まとめ」

「まとめ」は、何を学んだか、どんな経験をしてきたかといった事実の振り返りで終わってしまうことが多い。単に記憶をたどって整理しただけでは、次につながらない。事実を並べるだけではなく、その事実が「自分にとってどんな意味があったのか」を再構成する作業こそが「まとめ」である。

その学習を通して、「何ができるようになったのか」「どんな考え方が身についたのか」といった認知的プロセスに加え、「苦労したところはどこか」「どんな葛藤があったか」といった情意的プロセスを振り返ることによって、「まとめ」は、単なる事実の羅列から、意味を持った「自分の物語」となっていく。

他者との関わりを考える「まとめ」

子どもたちは仲間や教師と協働しながら学んでいる。授業では対話によって、新たな視点を獲得し、視野を広げていく。さらに、「〇〇さんの説明で納得できた」「〇〇さんにアドバイスしたら、できるようになって自分も嬉しかった」のように、互いの学びに貢献することも学校の学びの価値である。

他者との関わりを通して育まれた自己効力感や自己有用感、社会的関係性といった非認知的側面に気づかせることで、「自分の物語」は唯一無二のものになっていく。

それは、学校で学ぶ意味や、仲間と学び合うこと

の価値を実感することにつながる。

次の学びへの橋渡しとなる「まとめ」

「まとめ」は、一度立ち止まって歩んできた道を振り返り、「自分の物語」として言語化していく作業である。さらに、その物語は終わりではなく、次の学校や学年へのプロローグにもなる。

進学先で挑戦したいことは何か、次の学年でもっと伸ばしたい力は何か、克服したい課題は何か、なりたいたい自分はどんな自分かなど、振り返ったら次は前を向いて未来の自分を想像させることで、新たな物語が始まっていく。

ハイライトを共有し、 未来につなげる「まとめ」

1年間使った教科書をめくりながら、学級でどんな学習をしたか思い出してみたい。「このとき〇〇さんが面白いことを言ってみんなで笑ったね」「先生が何度も説明してくれたね」のように、子どもたちから出てくるエピソードも大切にしたい。そして、学習を振り返りながら、自分にとっての意味や他者との関わりを考えさせていくことがポイントとなる。

最終的には、言語化によって思考が整理されるが、あまり時間をかけられない年度末、物語のハイライトシーンのキーワードだけを書いて、紙芝居プレゼンテーションで発表してはどうだろう。紙芝居の最終ページは、「4月からは」の定型とし、未来につなげて締めくくりにする。

教師が子どもたちの物語の編集者となって学校文化としての「まとめ」をアップデートしていきたい。春は、子どもたちだけでなく、教師にとっても新しい物語の始まりとなる。

(きな・ともひろ=国士館大学教授/全国連合小学校長会顧問)

組織と人を動かし学校を前に進める入門書! (予約受付中!)

教頭・副校長のマネジメント入門

【著】長島和広/四六判/定価 2,530 円

本の詳細およびご予約は、右QRコードより小社ホームページをご利用ください。

